

平成19年9月の解説（府県天気予報）

【9月の天候状況】

上旬は北日本、東日本では台風や前線の影響で曇りや雨の日が多く、西日本では高気圧に覆われて晴れの日が多くなりましたが、大気の状態が不安定でしばしばにわか雨が降りました。中旬は北日本の日本海側、東日本・西日本の太平洋沿岸、沖縄・奄美の地方では台風や前線の影響を受けて曇りや雨の日が多く、そのほかの地方では晴れの日が多くなりました。下旬は北日本では低気圧や前線がしばしば通過し、曇りや雨の日が多く、東日本、西日本では高気圧に覆われて晴れの日が多くなりました。

月を通しての日照時間は、東北地方と東日本日本海側、および西日本で平年より多く、北海道、沖縄・奄美地方では平年より少なくなりました。降水量は北日本、沖縄・奄美地方で平年より多く、東日本日本海側と西日本では平年より少なくなりました。気温は全国的に平年より高く、平年より3以上高くなった観測地点もありました。

【9月の検証結果】

17時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報が76%で例年^(注)より5ポイント低く、明後日予報が75%で例年より2ポイント低くなりました。地方毎の適中率では、明日予報は近畿、中国、四国、九州北部、九州南部、沖縄地方で例年より7から18ポイント低くなりました。明後日予報は北陸、近畿、四国地方で例年より7から11ポイント低くなりました。明日の最高気温の予報誤差は例年に比べて近畿地方で0.4、九州南部地方で0.3小さく、全国平均は0.1小さい1.8でした。また、最低気温の予報誤差は、九州北部地方で例年より0.3小さく、全国平均は例年と同じ1.3でした。

^(注)例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【9月の天気予報から】

9月14日は東日本から西日本にかけての所々で雨が降りました。これは12日に低気圧が北日本を東へ進んだ後、13日から14日にかけて前線が本州の南岸付近に停滞したためです。

9月13日の夕方、東京地方に発表した天気予報では、14日(明日)の天気を「雨で昼前から曇り」と予報しました。これは13日に本州の沿岸から離れた海上に停滞していた前線(図1)が14日には弱まりながらも沿岸まで北上すると予想し、関東地方には南からの暖かく湿った空気が流れ込み大気の状態が不安定となって雨雲が発生し易くなると考えたためです。

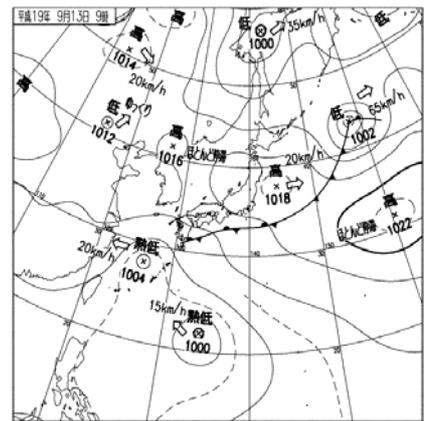


図1 地上天気図(9月13日9時)

実際、前線は本州の沿岸まで北上しました(図2)。しかし、雨雲が発生したのは、東海地方から西の範囲で東京地方では朝まで雲に覆われたものの雨は降りませんでした(図3)。関東地方では南からの暖かく湿った空気の流入が予想より弱かったためです。この前線は午後には弱まって、15時には消滅しました。

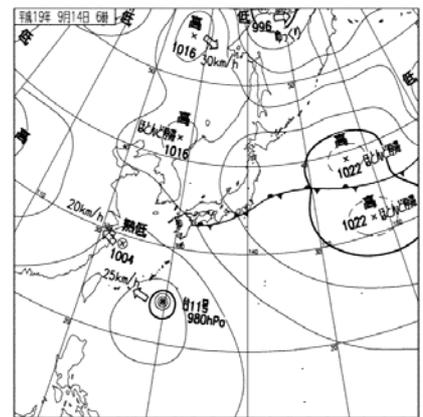


図2 地上天気図(9月14日6時)

停滞前線付近では、前線活動の強さ、上空の気温、風、地上付近の気温、風、湿度、地形などのさまざまな要素の影響を受けて雨雲の発生する範囲や時間帯が大きく変わります。そのため概ね予想通りであっても、一部要素の予想が実際と異なると天気が予想と大幅に変わってしまうことがあります。停滞前線付近の天気は予報が難しい現象の一つです。



図3 前1時間解析雨量(9月14日6時)

【11月の天気予報の利用にあたって】

晩秋になると、冬型の気圧配置になることが多くなって、日本海側を中心にしぐれ模様になり、北日本では雪やみぞれが降るようになります。降水が雨となるかみぞれや雪となるかはその時の地上・上空の気温や湿度などの状況によって複雑に変化します。降り始めは雨でも途中からみぞれや雪に変わったり、逆にみぞれや雪が途中から雨に変わったりもします。

雪が降れば視界が悪くなり、積もれば路面が滑りやすくなるなど、雪は雨に比べて降水量が少なくても人々の生活や交通に大きな障害となる場合があります。天気予報や雪に関する気象情報を上手に利用して雪への備えを万全にして下さい。